

事例 4

「話すこと・聞くこと」の言語活動を通して『羅生門』を読み深める

※この事例は「読むこと」を主とする指導の単元の事例であり、年間指導計画の上でも「読むこと」の領域に位置付けている。「話すこと・聞くこと」の言語活動は、「読む能力」を育むために取り入れた学習活動である。

1 育成を目指す言語能力

本単元は、文学的な文章を読んで、人物、情景、心情などを表現に即して的確にとらえる能力を育成するために計画したものである。学習指導要領「国語総合」の「C 読むこと」の指導事項「ウ 文章に描かれた人物、情景、心情などを表現に即して読み味わうこと。」を指導の中心に取り上げ、「文章の舞台となる情景や、登場人物の描写や心情の推移を的確にとらえている。」という評価規準を中心にして評価する。言語活動例の「(ア) 文章に表れたものの見方や考え方などを読み取り、それらについて話し合うこと。」や「(イ) 考えを広げるため、様々な古典や現代の文章を読み比べること。」を参考に、冒頭で述べた能力を育成する。

この実践は、グループで話し合うことで登場人物の人物像に迫ったり、オリジナルの『羅生門』を作成したりする学習活動を取り入れることで、生徒の主体的な学習活動を促し、本文の表現を味わうとともに、作品を通して自分なりの考えを深める学習活動を展開したものである。

2 学習活動の概要

(1) 単元名 小説『羅生門』（芥川龍之介）

(2) 単元の目標

- ①文章を読んで、叙述に即して内容を的確に読み取ったり、表現に即して読み味わったりする態度を身に付ける。 (関心・意欲・態度)
- ②文章に描かれた人物、情景、心情などを表現に即して読み味わう。 (読む能力)
- ③様々な文章を読んで、ものの見方、感じ方、考え方を広げたり深めたりする。 (読む能力)
- ④文や文章の組み立て、語句の意味、用法及び表記の仕方などを理解する。 (知識・理解)

(3) 単元の評価規準

関心・意欲・態度	読む能力	知識・理解
①文章を読んで、叙述に即して内容を的確に読み取ったり、表現に即して読み味わったりして、ものの見方、感じ方、考え方を広げたり深めたりしている。	①文章の舞台となる情景や、登場人物の描写や心情の推移を的確にとらえている。 ②『羅生門』と『今昔物語集（『羅生門』の典拠）』を読み比べて、書き手の意図について自分なりの考えを深めている。	①語句の意味、用法及び表記の仕方などを理解し、語彙を豊かにしている。

(4) 指導と評価の計画（11時間）

時間	学習活動	指導上の留意点	単元の評価規準と評価方法
1	初発の感想を書く (1)教科書本文を読む。 (2)初発の感想を「感想プリント」に記入する。		関心・意欲・態度① (「感想プリント」の記入状況)
2	物語の冒頭部を読み深める (1)書き出し部分から「羅生門の様子」を読み深める。 (2)物語設定や羅生門の描写から作者の意図についてグループで話し合い、発表する。	○初発の感想を紹介したり視点を示したりして、話し合い活動が活発になるようにする。 ○『羅生門』とその典拠である『今昔物語集』の比べ読みを通して、『羅生門』における作者の表現の意図に気付かせる。 ○「国語総合」『絵仏師良秀』の単元(5月)での、『地獄変』との比べ読みを踏まえて、二次的創作の作品における表現意図を考えさせる	読む能力① (ワークシート 資料1 への記入状況) 読む能力② (ワークシート 資料1 への記入状況、発表の内容)
3	「下人の人物像」を話し合う (1)本文より「下人」の描写をまとめる。 (2)(1)の学習を踏まえて「下人の人物像」をグループで話し合い、発表する。	○「下人の人物像」をグループで話し合う際は、根拠を本文に求めることに注意させる。	読む能力① (ワークシート 資料2 への記入状況) 読む能力② (ワークシート 資料2 への記入状況、発表の内容) 関心・意欲・態度① (ワークシート 資料2 の記入状況)
4	「羅生門の下」での下人の心理を理解する (1)本文の叙述に即して、「下人」の心理を的確に読み取る。	○「下人」が自分の状況を把握し論理的に結論を出しながらも、情動的に認められないという心理であることに注意させる。	読む能力① (ワークシートへの記入状況)
5	物語の中盤を読み深める (1)「はしごの中段の下人」と「楼上の老婆」の描写をまとめる。 (2)「老婆の人物像」をグループで話し合い、発表する。	○「老婆の人物像」をグループで話し合う際は、根拠を本文に求めることに注意させる。 ○「第2時」の注意点と同様、『今昔物語集』を比較させる。	読む能力① (ワークシート 資料3 への記入状況) 読む能力①・② (ワークシート 資料3 への記入状況、発表の内容) 関心・意欲・態度① (ワークシート 資料3 の記入状況)
6	「はしごの中段」での下人の心理を理解する (1)「楼上の老婆」を見た「下人」の心情を理解する。 (2)本文の叙述に即して「下人」の心理を的確に読み取る。	○「楼上の老婆」を見た際の「下人」の心情が、どのように移り変わっていくのかに注目させる。	読む能力① (ワークシートへの記入状況)

時間	学習活動	指導上の留意点	単元の評価規準と評価方法
7	「羅生門楼上」での下人の心理を理解する (1) 本文の叙述に即して「下人」の心理を的確に読み取る。 (2) 「老婆」が自分の行為を正当化しようとする際に用いた論理を理解する。	○前時で学習した「下人」の心理がどのように変化しているかに注目させる。 ○「悪に対する悪の肯定」と「生きるために仕方なくする悪の肯定」の二点で老婆の論理が成り立っていることを理解させる。	読む能力① (ワークシートへの記入状況)
8	物語の結末を読み取る (1) 「老婆」の話聞いた「下人」の叙述に即して「盗人」になるまでの心理を的確に読み取る。	○「下人」が悪を働くにあたって、「老婆」の論理を利用している点に気付かせる。 ○前時までの「下人」の描写と、本時との相違や『今昔物語集』との違いに注目させる。	読む能力① (ワークシートへの記入状況) 読む能力② (ワークシートへの記入状況、発表の内容)
9 11	小説『羅生門』の設定を1つだけ変えて、オリジナル『羅生門』を創作する (1) 設定を変える部分や、変更後のオリジナル『羅生門』の構成をグループで話し合い、物語を作る。 (2) 各グループで作成したオリジナル『羅生門』の発表を聞き、感想を記入し、評価する。	○変える設定は、下人の心理を揺さぶるような設定であることを条件とする。 ○話し合い活動や物語作成が滞ってしまったグループには、例を示して活動が活発になるよう配慮する。 ○各発表につき数名ずつ感想を発表させる。	読む能力① (ワークシート資料4への記入状況、発表の内容) 関心・意欲・態度① (評価シート資料5の記入状況)

3 評価の例

第1時で初発の感想を書かせる際に、単に「感じたこと」を書かせるだけでなく、「疑問に思ったところ」「表現が面白いと思ったところ」など、いくつかの視点を提示して考えさせたところ、平素は感想を「書くこと」に対して消極的な生徒から、様々な感想や気付きが出され、その後の学習に対する「関心・意欲」の高まりが感じられた。(初発の感想資料7)

第2時から第5時での話し合いの場面や、第9時から第11時でのオリジナル『羅生門』の創作活動の場面では、生徒は教科書本文を丹念に読み返しては、読み取ったことを元に活発に話し合っていた。普段は教材文を受動的に読んでいるような生徒が多いが、この単元では主体的に教材文に向き合い、読み味わったり読み深めたりしている様子が見て取れた。生徒が話し合いを通して練り上げたオリジナル『羅生門』は、芥川の『羅生門』の文体や雰囲気や踏まえて世界観を保持しつつ、新たな展開を書き加えた作品になっていた。(作品例資料6)

4 成果と課題

(1) 成果

この実践は、グループで話し合うことで登場人物の人物像に迫ったり、オリジナルの『羅生門』を創作したりする学習活動を取り入れることによって、「文学的な文章を読んで、人物、情景、心情などを表現に即して的確にとらえる」能力の育成を目指したものである。指導に当たっては、

授業者主導の講義に陥らないように留意し、生徒が話し合い活動を通して主体的に教材に向き合えるような指導を心がけた。

その留意点の一つとして、生徒の初発の感想を単元のあらゆる学習活動に紹介する機会を取り入れた。3クラス分の合計約120名の生徒の初発の感想を分類すると、『羅生門』で扱いたい事項がほとんど網羅されていたことに感心させられた。生徒は、他者の読みを自分の読みと比べるなどして読み深めながら教材と向き合うことができた。**資料7**

また、前述のグループでの話し合い活動において、「人物、情景、心情などを表現に即して的確にとらえ」つつも、新たな人物像の設定やオリジナル『羅生門』の作成など創作的な活動を取り入れた。この活動は、まさしく芥川龍之介が『今昔物語集』から、『羅生門』を執筆した際の思考活動と通じるものがあるのではないかと考え、『羅生門』の読解において、『今昔物語集』と『羅生門』の比べ読みをさせ、書き手の意図について考えさせた。その結果、話し合いによるオリジナル『羅生門』の創作活動を通して、芥川『羅生門』における老婆が下人の心理を揺さぶったことに気づき、ほとんどのグループが「老婆」の部分を変更し、なおかつ『羅生門』の世界観を残した作品に仕上げた。また、作品の多くが芥川の文体を真似て作成されていた。これらの点で、話し合いによる他者と自分の読みの交流を通して、文章に描かれた人物、情景、心情などを表現に即して読み味わい、読み深めた様子が見て取れた。

なお、2007年4月に公表された、「平成17年度高等学校教育課程実施状況調査 教科・科目別分析と改善点」によると、「生徒質問紙調査と教師質問紙調査との比較」において、次のような分析と指摘がなされている。

実社会では、様々な場面で、単なる教養にとどまらず、文学的な文章を読むことによってはぐくまれる豊かな情緒や感性の大切さが再認識されてきており、このようなことも踏まえた指導の改善が求められる。

文学的な文章を読むこと(生徒質問紙・教師質問紙)

	好きだった	きらいだった	普段の生活や社会生活の中で役に立つと思った	役に立つと思わなかった
生徒	29.6%	40.7%	30.3%	23.8%
	生徒は興味を持ちやすい	生徒は興味を持ちにくい		
教師	64.3%	13.0%		

指導に当たっては、このような生徒の意識に十分配慮する必要がある。具体的な指導においては、「話すこと・聞くこと」、「書くこと」、「読むこと」のいずれの授業においても、ともに学び合う中から自分の力が伸びたと意識できるような指導を通して学習の成就感を味わわせ、対人関係能力やコミュニケーション能力、ひいては伝え合う力、生きる力の伸長へとつなげていくことが大切である。

この調査に見られる教師と生徒の意識の差の背景には、いわゆる教師主導のパターン化した講義形式による授業の影響があるのではないだろうか。その点で、この単元において、登場人物の人物像を話し合ったり、話し合いを通してオリジナル『羅生門』を創作したりする活動を通して、多くの生徒が個人の読みでは気付かなかった多様な読みに出会うことで、読みを深めることができたと思われる。

(2) 課題

「下人」と「老婆」の人物像を話し合わせる際には、根拠を本文に求めるように注意させたが、グループの多くの話し合いの内容が、やや奇をてらったようなものになってしまった。それは、話し合い活動に生徒が意欲的に取り組んだ証でもあるのだが、オリジナル『羅生門』作成の前段階の活動としては改善の余地がある。今後同様の指導を展開する際には、マインド・マップの手法を取り入れて、発想を有機的に広げさせるような改善を加えたい。

また、自分の考えをグループ内で発表する、いわゆるバズセッションは進んでできるが、グループでまとめたものを全生徒の前で発表することはうまくできない生徒が多かった。そのため、他のグループの発表を聞いて評価するという活動がうまくいかなかった。今後は、他の科目や単元での「話すこと・聞くこと」に関する指導との連携を図って、発表や聞くことが効果的に展開できるように指導計画を練り直したい。

使用教科書

・『改訂版 高等学校 国語総合』第一学習社

参考文献

- ・『今昔物語集 四』（『日本古典文学全集』小学館）
- ・『今昔物語集 本朝世俗部四』（『新潮日本古典集成』新潮社）
- ・中洲正堯・国語論究の会著『表現する高校生—対話をめざす教室から—』三省堂
- ・北川達夫 フィンランド・メソッド普及会『図解 フィンランド・メソッド入門』経済界

資料 1

<p>『羅生門』ワークシート 1年（ ）組（ ）番 氏名（ ）</p>	<p>1 羅生門（羅城門）の様子をまとめよう。</p> <ul style="list-style-type: none">・広い門の下には、この男のほかにだれもいない。・丹塗りのはげた、大きな円柱に、きりぎりすが一匹とまっている。・羅生門の修理などは、だれも捨てて顧みる者がなかった。・狐狸が棲む。盗人が棲む。とうとう引き取り手のない死人を、この門へ持ってきて捨てていく。・気味を悪がって、この門の近所へは足踏みしない	<p>2 羅生門が荒れ果ててしまった理由を本文から抜き出そう。</p> <ul style="list-style-type: none">・この二、三年、京都には、地震とか辻風とか飢饉とかいう災いが続いて起こった。洛中のさびれ方はひととおりではない。・仏像や仏具を打ち砕いて、丹や金銀の箔がついた木を薪の料に売っていた。	<p>3 『今昔物語集』を読み、物語設定における『羅生門』との違いを抜き出してみよう。</p> <ul style="list-style-type: none">・盗みせむがために京に上りける男・羅城門の下に立ち隠れて立てりけるに・朱雀の方に人しげく行きければ、人の静まるまでと思ひて・山城の方より人どものあまた来たる音のしければ、それに見えじと思ひて	<p>4 『今昔物語集』と『羅生門』を比較して、作者の表現の意図について話し合おう。</p> <ul style="list-style-type: none">・『今昔物語集』では、人通りがあるのに、『羅生門』ではだれもない。・『羅生門』には門が荒れ果てている様子や、洛中のさびれた様子が書かれている。・『今昔物語集』では、すでに盗人であるのに、『羅生門』では「一人の下人」という設定である。・『今昔物語集』では盗人であるため隠れているが、『羅生門』では雨やみを待っている。	<p>《作者の表現の意図》</p> <p>←</p> <p>羅生門の気味の悪い様子 一人の下人が盗人になるまでの心理を描く</p>
---	--	--	--	---	---

『羅生門』ワークシート 一人の人物像について話し合おう

1年()組()番 氏名()

1 本文から「下人」の描写を抜き出そう。

- ・洗いざらした紺の襦のしりを据えて、
- ・右のほおにできた、大きなきびを気にしながら、
- ・ぼんやり雨の降るのを眺めていた。
- ・主人からは、四、五日前に暇を出された。
- ・「雨に降り込められた下人が、行き所がなくて、途方に暮れていた。」
- ・どうにもならないことを、どうにかしようとして、とりとめもない考えをたどりながら、雨の音を聞いていた。

2 文中の描写に根拠を求めながら、「下人の人物像」をグループで話し合って作り上げよう。

- ・職業は？
- ・仕事ぶりはどうだったのか？
- ・年齢や性格は？
- ・なぜ羅生門にいたのか？

(話し合った人物像の例と考える根拠)

○十八歳(↑大きなきび)、大工の弟子(想像)

主人は六十歳すぎの怖い人(想像)

下人は面倒くさがり、働く意欲に欠ける(↑四、五日前の解雇)

次の職を考えているうちに羅生門に着いた(↑四、五日前の解雇)

好奇心旺盛(↑羅生門に上る)

○十五歳、十三歳で父死亡

大家族の長男で農家に働きに出る(想像)

芋の盗み食いがばれた(3回目)のでやめさせられた(想像)

父が昔、羅生門に連れてきてくれたので思い出して来た(想像)

3 他のグループの「下人の人物像」の中で興味深かったものをメモしよう。

『羅生門』ワークシート 老婆の人物像について話し合おう

1年()組()番 氏名()

1 本文から「はし」の中段の下人」の描写を抜き出そう。

- ・一人の男が猫のように身を縮めて、息を殺しながら、上の様子をうかがっていた。
- ・短いひげの中に、赤くうみを持ったにきびのあるほおである。
- ・下人は、やもりのように足音を盗んで、

2 「羅生門の楼上の老婆」の描写を抜き出そう。

- ・檜皮色の着物を着た、背の低い、やせた、白髪頭の、猿のような老婆
- ・猿の親が猿の子のしらみを取るように、その長い髪の毛を一本ずつ抜き始めた。

3 『今昔物語集』の老婆はどんな人物設定になっているか。

- ・年いみじく老いたる姫の、白髪白き
- ・髪の毛を抜いている人物(若くして死んだ女性)に仕えていた。

4 文中の描写に根拠を求めながら、「老婆の人物像」をグループで話し合って作り上げよう。

・今まで(都が荒れ果てる前まで)はどんな人生を送ってきたか？

・どこに住んでいるのか？

・髪の毛を抜くことを始めたきっかけは？

(話し合った人物像の例)

○昔は主人に仕えていたが、京の街が荒れて主人が死んでしまった。そのため羅生門に住みつく。

○昔は裕福だった。八十歳くらいで歯が抜けている。ずる賢く、悪知恵が働く。着物はつぎはぎだらけ。夫は死に、息子にも見放された。

○八十五歳。夫と二人で農家を営んでいた。おしどり夫婦であったが、夫は栄養失調で死んだ。夫が先に死んでしまったので、かつらを作って売ろうとした。

5 他のグループの「老婆の人物像」の中で興味深かったものをメモしよう。

1 『羅生門』の設定を1年()組()番()氏名()を話し合っておろう。私のグループは [] を [] に変えます。

2 変えた部分をふまえて、オリジナル『羅生門』のあらすじを書こう。

3 あらすじをもとに、オリジナル『羅生門』を作成しよう。

オリジナル『羅生門』相互評価票 1年()組()番 氏名()

	変えた設定	結末	コメント
A			
B			
C			
D			
E			
F			

オリジナル『羅生門』を作った感想や、他の班の発表を聞いた感想などを自由に書こう。

下人の問いに老婆は、行方不明になった理由や今までの事を、ぼつり、ぼつりと話し始めた。老婆が全てを話し終えた頃には、周りはずっかり暗くなっていた。しかし雨は降り続けている。話を聞き終わった下人は、静かに涙を流し、老婆を優しく抱きしめた。

雨がやんだ頃の、羅生門の楼には、二人の姿はもうなかった。

作品例5 「老婆」を「下人の祖母に似た老婆」に変える

下人の目は、そのとき、初めて、その死骸の中にうずくまっていた人間を見た。椀皮色の着物を着た、背の低い、やせた、白髪頭の老婆だ。しかし、よく見ると、その老婆の顔は下人の祖母に似ていたのだ。その時下人は、老婆に対して親近感を覚えた。

「しかし、老婆の手元を見た瞬間、下人の顔は青くなった。老婆が死人の髪の毛を抜いていたからだ。下人はそれを見て、一瞬にしてさきほどの親近感が消えてしまい、気味が悪くなった。そして、下人は老婆をとめようとした。

「なにをしている。」と下人は言った。老婆は一目下人を見て弩にでもはじかれたように、飛び上がった。

下人を恐れた老婆は、あっさりと自分のしたことについて話した。

「この髪を抜いてな。かつらにしようと思うたのじゃ。」

下人の心は冷ややかになるばかりであった。老婆は続けた。

「死人の髪を抜くという事は、なんぼ悪いことかもしれない。しかし、この女も悪いことをしたし、だからむしろ悪いことをしなければいけないのだ。」

下人の老婆に対する視線はすでに、醜い物を見るような目であった。下人がこのような感情を持つには理由があった。下人の祖母はとも優しい人柄で、時には厳しい人だった。だから、この祖母に似ている老婆の卑しさが浮き彫りになったからである。

「このような人間に落ちぶれてたまるか。いくらこのような現状に立たされても、人間の情を忘れてはならないだろう。」

下人は静かにその場を離れようとした。老婆は立ち去る下人に困惑したが、下人は振り返りもしなかった。

下人は、はしごを下りて、来た道を帰ってゆく。行くあてはない。その夜の羅生門の楼の上では、死人を漁る音がずっと続いていた。

作品例6 「老婆の行動」を「違う行動」に変える

下人の目は、そのとき、初めて、その死骸の中にうずくまっている人間を見た。椀皮色の着物を着た、背の低い、やせた、白髪頭の猿のような老婆である。その老婆は、右の手にあぶく物を持って、そのお魚の焼き加減を眺めていた。表面のうるこの様子を見ると、たぶん鯉であろう。

下人は、六分の空腹感と四分の好奇心とに動かされて、暫時は息をするのさえ忘れていた。

その鯉が、黒くなるのに従って、下人の心には空腹感が少しずつ増していった。そうして、それと同時に、この鯉に対する欲望が、少しずつ動いていった。いやこの鯉に対する欲望が、一つ一つ強さが増してきたのである。そのとき、下人は我慢できず、老婆の前に現れた。そして下人は、

「その魚をよこしたまへ。」と言って老婆から魚を奪い取った。その魚を奪い返そうとしたとき、老婆はたき火を倒してしまった。

羅生門は火の渦にのみこまれた。老婆と下人の行方は誰も知らない。

作品例7 「老婆」を「若い女」に変える

下人の目は、そのとき、初めて、その死骸の中にうずくまっている人間を見た。くすんだ白い着物を着た小柄の若い女である。死骸の一つ一つをかきわけていた。

下人は、七分の恐怖と三分の期待に動かされ、暫時はまばたきをするのも忘れていた。下人は忍び足で若い女に近づいた。そして、

「何をしているのだ。」

と声をかけた。

すると、若い女は驚いた顔でふりむき、ふるえた声で、

「このたくさんの死骸の中から殺された母の遺体を探しているのです。」

と言った。下人の心から恐怖がいつのまにか恐怖が消えていた。

「どうして殺されたのだ。」

と下人は言った。若い女は泣きながら、こう答えた。

「うちには、借金があったのです……。」

下人は母親の特徴を聞き、黙々と探したのである。ようやく見つかり、下人は立ち去ろうとした。

「何か恩返しをさせていただけませんか。私には財産も何も持っていないので、

せめて私をもらっていただけませんか。」

下人は深くうなずいた。その後下人は働きに出て、質素だが子供も授かり、三人で幸せな日々を送った。

作品例8 「老婆」を「美しい娘」に変える

階段を上ると下人の目には、死骸の中にうずくまっている人間を見た。水色の着物を着た、背の高い、きれいな黒髪から白い肌をのぞかせ、大きな黒い瞳の若い女性が死骸の髪を抜いていた。下人の心には、今までにない衝撃と疑問が走った。

下人には、なぜ美しい娘が死人の髪を抜くのかわからなかったと同時に、好奇心も生まれた。

そこで下人は、両足を力を入れて、いきなり階段から上へ飛び上がった。下人の気配に気づいた美女は驚いて振り返ると、下人を見て奇声をあげた。そこで下人は、美女に問いかけた。

「何をしているのか。」

その問いかけに美女はとまどいながらも口を開いた。

「この髪を抜いてかつらにしようと思っただけです。」

下人は美女の哀れさに心を打たれ、何も言わずに美女の隣に腰をおろし、死人の髪を抜き始めた。しばらくの間沈黙が続き、美女はそれに耐えきれなくなり、その場から逃げ出そうとした。下人はそれに気づき、美女の腕をつかみ、こう言った。

「これからの人生を私と共に過ごさないか。」

下人の突然の告白に美女は少し戸惑ったが、恥ずかしがりながらも、微笑みながらうなずいた。

二人の行方は誰も知らない。

オリジナル『羅生門』集

作品例1 「老婆」を「少年」に変える

下人の目は、そのとき、初めて、その死骸の中にうずくまっていた人間を見た。藍色の着物を着た、背の低い、坊主頭の少年である。その少年は、右の手に火をともした松の木切れを持って、その死骸の一つの顔をのぞき込むように眺めていた。髪の毛の長いところを見ると、たぶん女の死骸であろう。

下人は、七分の好奇心と三分の恐怖とに動かされていた。少年は、松の木切れを、床板の間に挿して、それから、今まで眺めていた死骸の首に両手をかけると、ちょうど、猿の親が子のしらみを取るように、その長い髪の毛を一本ずつ抜き始めた。その髪の毛が、一本ずつ抜けるのに従って、下人の心からは恐怖心が消えていった。下人の心は好奇心に満ち、少年がなぜ女の死骸の髪を抜いているのかという疑問が浮かび上がった。下人はゆっくり少年に歩み寄り、

「坊主、そこで何をしている。」

と声をかけた。少年は、初めは下人の声に驚いていたが、逃げようとする気配もなく静かにこう答えた。

「わしは一昨日母さんを亡くした。疫病だった。悲しかったがな、わしは母さんの分まで強くなりたいたいじゃ。だから母さんの髪の毛を形見として抜いていたのじゃ。」

下人は、少年の話を聞き終えると大きく溜め息をついた。

「坊主、お前は歳はいくつだ。」

「十歳だ。そうだ、あと抜いた髪をかつらにして売って金にしようと思うのじゃ。母さんも、わしのためなら許してくれるはずじゃ。」

下人はこの平凡な少年の答えに、なぜか感動してしまった。この時、下人は先ほど羅生門の下で悩んでいた事の答えが出ていた。

「坊主、わしはお前の話を聞いて決心がついたぞ。ここでお前に出会えなかったら、飢え死にを恐れて盗人になっておったかも知れぬ。しかし、わしも坊主のように強く生きていきたいと思った。またどこかで仕事を探さねばならん。」

下人は少年の坊主頭を撫でると、急なはしごを降りていった。外には、ただ、黒洞々たる夜があるばかりである。

下人の行方は、だれも知らない。

作品例2 「羅生門の上」を「死体だけしかない場所」に変える

下人はやもりのように足音を盗んで、やつと急なはしごを登りつめた。楼の中は闇にのまれたように暗く、そして寒かった。下人は目を凝らして周りを見た。するとそこには、噂に聞いたとおり、いくつかの死骸が、無造作に捨ててあった。それらは腐乱しており、下人は思わずその臭気に鼻を覆った。そして、死体につまづかないように、ゆっくりと歩いていった。

下人は、空いている所がないか探し出し、やつと自分一人横になれる場所を見つけ、横になった。そのころには臭いにもなれていて、四、五日前から蓄積していた疲労のため、下人はすぐに雨の音と共に深い眠りについていた。

翌日、楼の中に下人の姿はなかった。外は久しぶりの快晴だった。とても心地の良い朝だった。下人は思った。

「盗人になるのも、飢え死にするのも嫌だ。」

久しぶりの快晴が曇っていた下人の心を変えたのだった。下人は歩き出した。行方、これは噂で聞いた話である。下人は三つほど離れた町で使用人として働いているらしい。

作品例3 「老婆」を「生き別れの母」に変える

下人の目は、そのとき、初めて、その死骸の中にうずくまっていた人間を見た。薄桃色の着物を着た、背の高い、やせた、黒髪のヒョウウのような女性である。その女性は、下人に気づき、近づくと「忠夫：。」とつぶやき一粒の涙をこぼした。下人は自分の名前を呼ばれ驚いた。しかし、その驚きはすぐに消え、それまで下人の心を決めていた恐怖と好奇心も消えた。それと同時にその女性を不審に思う気持ちが生まれた。するとその女性はさらに下人に近づき、下人が首からさげているお守りを手にとった。そして女性は下人に尋ねた。

「このお守りはどうしたの。」

下人は戸惑いながら答えた。

「このお守りは、昔、俺が働いていた所に預けられたときに母が俺に渡した物だ。」

それを聞いた女性は「やっぱ、そうだったのね。」とつぶやいた。そして女性は泣きながら話し出した。

「このお守りを渡したのは私なのよ。実は、あなたがまだ幼かった頃、私たちは生活が苦しくて、それでもあなただけでも元気に暮らしてほしかったから、あずけたのよ。だから別れ際にこのお守りを渡したのよ。こんな私を許してね：。」

下人は真実を知ると、ふと幼き頃の記憶を思い出し、母に対する暖かな感情がわきこぼった。

「俺は怒っていないから、今まで一緒に居られなかった分を、これから取り戻さないか。だから、一緒にくらさないか。」

下人は実の母と分かった女性に、こう言ったが、女性は少し考えると、首を振った。

「忠夫。私はあなたと一緒に暮らせる資格はないわ。だって、私は十数年前にあなたのことを捨ててしまっていたのだから：。」

下人は「そうか。」と言うと、「うん。」とうなずいた。しばらくすると、二人は羅生門をゆっくり出た。歩きながら二人はいろいろなことを語りあった。

「これからはお互い良心を忘れず、別々の道を歩んでいこう。」

「そうね、別々の道を歩んでしまってもいいけれど、あなたのことは忘れないわ。」

母はそうとうと下人と別の方向を向いて歩いていった。すると、下人は立ち止まり、「おおきに。」

と明るく大きな声で言い、走って行った。

下人の首には母からももらったお守りが揺れていた。

作品例4 「老婆」を「下人の母親」に変える

下人は、六分の恐怖と三分の好奇心、そして一分の期待に動かされて、楼の上へ飛び上がった。

「おい、お前。そこで何をしている。」

呼び止められた老婆は、下人を見ると一瞬気まずそうな顔をしてうつむいた。なかなか話をしない老婆は、しびれを切らした下人は、太刀の鞘をはらって、白い鋼の色を、その目の前に突きつけた。けれども、老婆は黙っている。下人は老婆にこう問いかけた。

「もしや、お前：。」

その言葉を聞いた老婆は、まるで弩にでもはじかれたように、勢いよく顔を上げて出口に向かって走り出したが、それを察した下人によって行く手をはばまれた。二人はしびし無言のまま顔を合わせた。下人は、老婆の顔に何故か懐かしいものを感じた。それと同時に思ってもみなかった言葉が、下人の口からもれた。

「：：母さん。」

それを聞いた老婆は勿論、言った下人さえも驚き、困惑した。しばらく経った後、老婆は深く息を吐き、小さく下人の名前をつぶやいた。

「やはり、俺の母親なんだな。何故このようなところに：：。」

資料7

『羅生門』初発の感想(抜粋)
 ※(一)内の数字は同様の感想を持った生徒数

羅生門の様子

からずの効果と考えた。羅生門の様子を描くうえで必要。不気味・気持ち悪い・怖い・残酷・グロテスク・どきどき(14)
 朱雀大路Ⅱメインストリートに死体があることが、ひどい状況を物語っている。
 きりぎりすは何の意図? ↓時間の流れをよく表現している。
 表現から羅生門の様子がよくわかった。

下人について

動物を使った比喩があった。(下人の様子を生き物を使って表していた。)
 にきびの描写が気になった。 ↓右のほおのにきび ↓赤くうみを持った。
 下人はなぜ話を聞きながらにきびを気にしていたのか。
 にきびの描写が3回も出てきた意図は?(4)
 下人がリストラされてかわいそう。
 なぜ四・五日前に暇を出されて羅生門に来たのか。
 下人は羅生門に来た時点で帰れない。
 「雨やみを待っていた」 ↓「途方に暮れていた」と言い直しているのが下人の心情を強調していた。
 私だったら、こんな気持ち悪いところで雨宿りをしない。
 「やもりのように」の表現がわからない。
 楼の上に人の気配があったら、普通はしごを上らない。
 自分だったら羅生門の上を上らない ↓死体があるから。

老婆について

なぜ老婆は羅生門にいたのか。
 老婆の言葉に共感。わかる気がする。
 老婆の毛を抜く理由に自分の拍子抜け ↓別な訳があっても。
 …。
 老婆の話には、下人の心を動かす何かがある。
 老婆は髪の毛を抜いてかつら ↓死人の肉を食べて生きているのでは? 老婆は羅生門の守り神?
 頭の中の天使と悪魔の話のよう、老婆の言葉は悪魔のささやき。

結末

続きが気になる(2)
 老婆 ↓死人から髪 下人 ↓生きている人間から着物(2)

「きつと、そうか。」が心に残る。 ↓これからする行動の肯定か。もつと別な意味が…。
 老婆は死んでそう。下人の行方は? 老婆のその後は?(2)
 下人の行方は? 着物を売ったか。主人の家に帰ったのか。
 老婆がどうなったのか。
 老婆はまた髪抜きを再開したのか?
 下人の行方は誰も知らない ↓老婆が殺したのでは?(2)
 着物をはぎ取った瞬間こそ盗人になった瞬間。
 老婆は果たして、下人にされたことに対してどう思ったか。

話の内容

生きるためにやむをえないのでは。
 下人の悪を憎む心の変遷に興味・おもしろい・わからないなど。
 自分の都合の良いように考えることは誰にでもある。
 追い詰められた人間の選択 ↓怖さ(3)
 飢え死にか盗人の二択しかない時代はおそろしい。
 人間のずる賢さや自己中心的な考え ↓人間をリアルに描く。
 人間の残酷さ・弱さ・矛盾があるのままだに書かれる。勇気がなく決断できない下人が悪人になった。昔も今も人間は人の言葉に左右される。
 極限状態では人はなんでもするのかな ↓下人も老婆もしかたがないのかも。
 自分だったら老婆を止めない ↓生きるためにしかたがないのだから。
 下人は悪を否定していたのに老婆の言葉を逆手に取って矛盾している。
 着物をはぎ行為は、毛を抜かれている死人たちの代わりにとつとせめてもの行動か?
 生きるためにしかたがないという理由・悪人になってまで生きたいという醜い考え。
 下人は自分勝手な人間だ。考え方の変化が早い。
 失望するからには何か期待していたのでは? 仕方なくやっつけているという期待。
 下人は盗人になる理由・言い訳を必要としていたのでは?
 「盗人になる」ことが「勇気」という表現であったのが嫌。

オリジナル『羅生門』のヒントになる感想

羅生門の修理が行われていたら、老婆も髪の毛を抜かないし、下人も盗みを働かなかつたらう。
 主人公が下人というのがおもしろい ↓平安Ⅱ貴族というイメージがあるので…。
 羅生門には、人間を負う方向へ持つていく力があるので?

羅生門は人の気持ちを変えてしまう所だ。
 楼の上の人物は、大柄ないかにも悪人がいると予想した。
 なぜ老婆なのか疑問。
 下人も老婆も最初から悪人ではない。
 つかみ合いの時、老婆に勝つ話がいいなと思った。
 老婆は下人に勇気を与えるきっかけとなった(4)

この話のキーパーソンは老婆 ↓下人の気持ちを変えた。
 羅生門は老婆の話を聞かなければ、盗人にならなかつたのでは? 髪の毛を抜かれた女になぜ生前の悪行について注意をしなかつたのか。下人も老婆に注意すればよい。
 老婆の言葉だけで、なぜ気持ちが変わるのか。老婆との接触により下人の心が変化した。

下人は老婆と会って心境が変化している。老婆の存在のおかげで、下人は死なずにすんだ。
 下人は残りの人生は盗人で生きたのかな?
 老婆との出会いのおかげで下人の勇気が生まれた。
 老婆は髪の毛を抜く以外に他に方法がなかったのか。

その他

フランス語の使用が気になる。(4)
 人物の名前が出ない。
 リアルな文章(3) ↓昔の話なのに現実的。
 なんのためにかつらをつくつたのか。(2)
 表情や動作が細かい。
 生々しい、リアル、人の動作や場面の風景。
 「作者は〜」という表現がおもしろい、作者が自分で説明をいれているのがおもしろい。
 この話は本当の話か、作り話か気になった。
 「頭身の毛も太る」の意味は?
 一つ一つの表現が細かい。
 「すれば」は結局「すれば」の意味がわからない。
 あざけるような声とは? 念を押したのはなぜか?
 なぜ着物を着たのと裸の死骸があつたのか?
 着物をはぎ取る意図は?(5)
 髪の毛を抜く行為に興味 ↓驚き。
 「ある勇気」とは?(2)